

第15回SGRAチャイナVフォーラム

アジアはいかに作られ、モダンはいかなる変化を生んだのか？－空間アジアの形成と生活世界の近代・現代－

日時：2021年11月20日（土）北京時間午後3時～4時30分（日本時間午後4時～5時30分）

方法：Zoom Webinarによる

共同主催：渥美国際交流財団関口グローバル研究会（SGRA）、北京大学日本文化研究、清華東亜文化講座所
後援：国際交流基金北京日本文化センター

■ 開催経緯

公益財団法人渥美国際交流財団関口グローバル研究会（SGRA）は、日本の民間人による公益活動を紹介するSGRAチャイナフォーラムを、北京をはじめとする中国各地の大学等で2007年から毎年開催してきました。2014年からは趣向を変え、清華東亜文化講座のご協力をいただき、北京をはじめとする中国在住の日本文学や文化の研究者を対象としてSGRAチャイナフォーラムを開催、日中韓を中心とした東北アジア地域の近現代史を、文化と越境をキーワードとして検討しています。本年も、これまでの成果を踏まえながら、「東アジアにおける広域文化史」の可能性を探ります。日中同時通訳付き。

■ フォーラムの趣旨

山室信一先生（京都大学名誉教授）の『アジアの思想水脈—空間思想学の試み』（人文書院、2017年。徐静波・訳『亞洲的思想史脈——空間思想學的嘗試』上海交通大学出版社・近刊予定）と『モダン語の世界へ：流行語で探る近現代』（岩波新書、2021年）などを手がかりとして、「アジアという空間が翻訳・留学などによっていかに作られたのか？」さらに、その時空間において「modern や globalization などがいかなる生活様式・思考様式の変容をもたらしたのか？」を概念語や日常語の視点からいかに捉えるのかを検討する。

■ プログラム

総司会 孫建軍（北京大学日本語文化学部）

【開会挨拶】 今西淳子（渥美国際交流財団）

【挨拶】 野田昭彦（国際交流基金北京日本研究センター）

【講演】 山室信一（京都大学名誉教授）

「アジアはいかに作られ、モダンはいかなる変化を生んだのか？」

－空間アジアの形成と生活世界の近代・現代－

【コメント】

王中忱（清華大学中国文学科）

劉曉峰（清華大学歴史系）

趙京華（北京第二外国語学院）

林少陽（香港城市大学中文及歴史学科）

【自由討論】

【閉会挨拶】 王中忱（清華大学中国文学科）

■ 講師略歴

<山室信一（やまむろ・しんいち）YAMAMURO Shin'ichi>



熊本県熊本市生まれ。1975年東京大学法学部卒業。衆議院法制局参事、東京大学社会科学研究所助手、東北大学助教授、京都大学人文科学研究所助教授を経て、同教授。2013年から2015年まで同所長。2017年定年退任、名誉教授。また、日本国内では各種研究助成金の審査委員を務め、中国では復旦大学や南開大学の日本研究所、北京日本学研究中心などで連続講義などを行い、東アジア歴史研究フォーラム委員、台湾大学日本研究中心評議員などを歴任した。

主要著書：『思想課題としてのアジア－基軸・連鎖・投企』（岩波書店 2001年12月）、『キメラ－満洲国の肖像・増補版』（中央公論新社、2004年7月）、『モダン語の世界へ－流行語で探る近現代』（岩波書店、2021年4月）。また、徐静波・訳『亞洲的思想史脈——空間思想学的尝试』（上海交通大学出版社）近刊予定。

■ 講師からのメッセージ

討議では、まずアジアというヨーロッパから与えられた空間概念が、いかにして当該空間に住む人々によって自らのアイデンティティーの対象となっていたのか、を翻訳や留学などによる思想連鎖の中で生まれた意義について考えたいと思います。そこではローカル・ナショナル・リージョナル・グローバルという4つの空間層と思想の存在態様をいかに関連させて捉えるか、という問題が重要になってきます。

次に、そうして生まれたアジアという空間の中で、人々の生活様式はどのように変容していったのか、を近代と現代という「二つのモダン」の次元で検討したいと思います。そこではモダン・ガールが髪や服装の長短の変化と関連して毛断嬢や裳短嬢などと表記されるなど、どのようなモダン語などで表象され、それが写真や絵画・漫画などでいかに視覚化されたのか、が重要な鍵となります。

こうした議論を通して、アジアにとってモダンやグローバリゼーションさらにはアメリカニズムとは何だったのか、を検討したいと思います。その討議においては、単に思想や研究の次元の問題に限らず、広く社会生活のありかたとしての way of life を考え直すための意見交換ができればと願っております。ここにはウイズ・コロナ時代におけるアジアとそこでの生活様式・思考様式を展望することも含まれるはずです。

今回の討議では、空間と社会生活と言葉（概念や流行語）という3つの次元をいかに結びつけていくのか、という方法論を模索するなかで「思想連鎖」や「思詞学」という研究視角を提言するに至った経緯についても触れ、忌憚のない御批判を戴きたいと切望しています。

■ 過去の SGRA チャイナフォーラム

[1] 第8回「近代日本美術史と近代中国」

19世紀以降の華夷秩序の崩壊と東アジア世界の分裂という歴史的背景のもとでつくられた近代の東アジア美術史が、歴史的な美術の交流と実態を反映していない「一国美術史」として語られてきたという問題を提起し、この一国史観を脱却した真の「東アジア美術史」の構築こそ、同時に東アジアにおける近代の超克への一つの重要な試金石となることを指摘した。（佐藤道信：「近代の超克－東アジア美術史は可能か」）

一方、「工芸」は用語の誕生から制度としての「美術」の成立と深い関係にある。アジアにおいては、陶磁器や青銅器や漆器などを賞玩してきた歴史があり、工芸にはアジアの人々が共感しうる近代化以前の生活文化に根差した価値観が含まれているが、近代では「美術」の一部とみなされる。「美術」と「工芸」は、漢

字圏文化と西洋文化との関係および葛藤を表していると同時に、日中両国のナショナリズム、国民国家の展開や葛藤とも深い関係にあることが確認された。(木田拓也「工芸家が夢みたアジア：<東洋>と<日本>のはざままで」)

(2014年11月22日(土)中国社会科学院文学研究所、23日(日)清華大学にて開催)

[2] 第9回「日中二百年—文化史からの再検討」

古代の交流史と対比して「抗争史」の側面が強調される従来の近代東アジア史観に対して、実際の近代日中韓三国間において、「他者」である西洋文化受容と理解という目的のもと、互いの成果・経験・教訓を共有する多彩多様な文化的交流が展開し古代にも劣らぬ文化圏を形成していたことを踏まえ、改めて交流史を結節点とした見直しの重要性を確認した。(劉建輝：「日中二百年—文化史からの再検討」)

(2015年11月20日(金) 内蒙古大学、22日(日) 北京大学にて開催)

[3] 第10回「東アジア広域文化史の試み」

いわゆる中間領域に存在する作品が内包する文脈から、「モノ」の移動にともなって生まれた多様な価値観と重層的な歴史と社会の有様が認識でき、文物が国家に属するという従来の既成概念を取り去り、改めて文物の交流を起点に大局的な文化(受容)史観を構築することの重要性を指摘した。(塚本麿充：「境界と国籍—“美術”作品をめぐる社会との対話—」)

次いで文学史からは、近代の日中外交文書における漢字語彙の使用状況とりわけ同形語の変遷をたどり、日本語から新漢字を輸入することによって古い漢字語彙から近代語へと変容していく現代中国語の形成過程から、ひとつの言語が存立するにあたり、実際の語彙の移動と交流に依拠する多層性と雑種性をもちうることを明らかにした。(孫建軍：「日中外交文書にみられる漢字語彙の近代」)

それぞれの報告から、「国境」や「境界」というフレームに捉われない多様な歴史事象の存在を認識し、改めて「広域文化史」構築の可能性とその課題を浮き彫りにし、近代に成立した国民国家の文化的同一性のもとに収斂された「一国文化史」という言説の虚構性や恣意性を明らかにした。

(2016年9月29日(木) 第3回アジア未来会議@北九州国際会議場にて開催)

[4] 第11回「東アジアからみた中国美術史学」

作品の持つ芸術性を編述し、それを取り巻く社会や歴史そして作品の「場」やコンテクストを明らかにすることによって作品の価値づけを行う美術史学は、近代的社会制度の中で歴史学と美学、文化財保存・保護に裏打ちされた学問体系として確立した。とりわけ中国美術史学の成立過程においては、前時代までに形成された古物の造形世界を、日本や欧米にて先立って成立した近代的「美術」観とその歴史叙述を継承しながらいかに近代的学問として体系化するか、そして大学と博物館という近代的制度のなかにいかに再編するかというジレンマに直面した。この歴史的転換と密接に連動しながら形成されたのが、中国美術研究をめぐる中国・日本・アメリカの「美術史家」たちと、それぞれの地域に形成された中国美術コレクションである。塚本麿充「江戸時代の中国絵画コレクション—近代・中国学への架け橋—」と呉孟晋「漢学と中国学のはざままで—長尾雨山と近代日本の中国書画コレクション—」により、このような中国美術あるいは中国美術史が内包する時代と地域を越えた文化的多様性を検証した。

(2017年11月25日(土) 北京師範大学にて開催)

[5] 第12回「日中映画交流の可能性」

日中友好の基礎は民間交流に在り、お互いをより幅広く、正しく知るためには、相手の「心象風景」を知ることが、民間交流の基礎を固める上で重要である。映画は、その大事な手段であり、この40年にわたり、大きな役割を果たしてきた。いまや中国は世界第一位のスクリーン数と第二の映画製作本数を誇る映画の一大市場であり、日本も世界第四位の映画製作本数を維持している。世界の映画産業のひとつの中心は、まさ

に東アジアにあると言ってもよいだろう。この映画大国である日本と中国の40年におたる映画交流を日本と中国の側からそれぞれ総括し、意見交換を行うことで今後の展望を検討した。

刈間文俊は、1977年の中国映画祭から字幕翻訳に携わり、これまで100本に近い中国映画の字幕を翻訳し、中国映画回顧展のプロデュースを行うなど、日本での中国映画の紹介に携わってきた。王衆一は、日本映画に精通し、「人民中国」編集長として多くの日本の映画人と交友を持ち、「日本映画の110年」を翻訳し北京で出版している。日中の映画交流の歩みを現場で知る二人の発表をもとに、日中双方の識者による討論を行った。

(2018年11月24日(土) 中国人民大学にて開催)

[6] 第13回「国際日本学としてのアニメ研究」

企業が主導して、複数の作家が同一のキャラクターや世界観(背景世界)を共有して創作物を同時多発的に生み出し、さらにそこにファンが二次創作やコスプレの形で創造的に参加する「メディアミックス」は、日本のアニメーションを中心とするコンテンツ産業の特徴的手法とされ、アニメの学術研究の新しい領域として注目を集めている。大塚英志『『翼賛一家』とメディアミックスの日本ファシズム起源』と秦剛「日本アニメにおける『西遊記』のアダプテーション：変異するキャラクター」により、東アジアでの歴史的な起源について中・日双方から検証した。

(2019年10月19日(土) 北京外国語大学日本学研究センターにて開催)

[7] 第14回「東西思想の接触圏としての日本近代美術史再考」

江戸時代後期以降、日本には西洋の諸理論が流入し、絵画においても、それまで規範であった中国美術の受容とそれを展開していく過程に西洋理論が影響を及ぼすようになっていった。一方、絵画における東洋的な伝統や理念が西洋の画家たちに影響を与え、さらにそれが日本や中国で再評価されるという動きも起こった。本フォーラムでは、その複雑な影響関係を具体的に明らかにすることで、日本近代美術史を東洋と西洋の思想が交錯する場として捉え直し、東アジアの多様な文化的影響関係を検討した。

(2020年11月1日(日) オンライン (Zoom ウェビナー) にて開催)